

日本学術会議

若手アカデミー会議(第24期・第4回)国際分科会

議事録

日 時：平成30年11月5日（月）8：00～10：00、16：00～17：00

会 場：

（午前）国立大学法人 政策研究大学院大学（GRIPS）1階 1A1B

〒106-8677 東京都港区六本木 7-22-1

（午後）日本学術会議5-A（1）会議室若手アカデミー国際分科会

日：2018年11月5日

参 加 者：

新福洋子、中西和嘉、加藤千尋、西嶋一欽、住井英二郎、松中学、岸村顕広、馬奈木俊介、狩野光伸、安田仁奈

午前分科会

1. GYA/JYA/INGSA Science Leadership for Advice Workshop のワークショップ全体の方向性目的の確認を行った。

- ・ワークショップ1日の段取りと役割分担の確認。
- ・タイムテーブルの確認。
- ・本分科会の旅費についての対応を協議。

午後分科会

2. 今日のワークショップの振り返りを行った。以下が意見。

- ・提言を出す前の行政とのコミュニケーションに役立った。
- ・通常話す機会のないGYAの人たちと話ができ良かった。
- ・サイエンスアドバイスに関するキーワードが学べたことに意義があった。
- ・自分のサイエンスアドバイスの能力開発する上で何が必要かの整理ができ、参考になって良かった。
- ・科学者と行政の信頼関係が重要であるということが、大きく認識できた。
- ・実際に scientific advice をするうえで、様々な立場の人を入れて実際にやってみたいと考えた。若手アカデミーが中心となって進める地域活性化のイベントを実施する上でも重要

な視点であり、非常に有意義なワークショップであった。

- ・昔からやっていたことでもそもそも科学者側がどうかかわるかについてより多くが学べた。

- ・いろいろな問題を社会からも科学者が取り入れて取り組んでいくことが出来たらよい。

- ・科学者が立法に関わることもあるが、従来の関わり方だけではうまくいかない、それでは通用しない分野がでてきていて、新しいアプローチ、科学者側からのアプローチが必要になってくるのではないか。

- ・ **evidence** があって、それを **truth** にもっていくには個人バイアスがあるのか、それをどう伝えるべきか。どこまでが事実でどこまでが解釈で、どこまでが予測なのかをちゃんと区別して伝えるべきかは大きな課題であると感じた。

- ・審議会は先に呼ばれたメンバーありきでやっていることもあり（人選を失敗すると空中分解して大変）発散して終わることもある。けれど、結論が先にありきの審議会がそもそもおかしいので、こうした経験をすることは勉強になる。

- ・提言を出すときに予算を含めてかなり事前調整を官僚、行政とすることが重要。そうでない限り実行されない。

- ・学官など異なるセクターの間 **connection** を作ってくださる方がいるとありがたい。繋がりが切れないように定期的に連絡をとることが重要。行政側にもある一定の割合で興味のある方がいるので、そういう人と積極的にコミュニケーションをとることが必要。

- ・早い段階で官と研究者の間に関連する話を先にしておくことが、アイデアや科学からの知見を実際に実行していくうえで重要。現在の提言の出し方やタイミングにはまだまだ課題があると思う。